

# 第一回「文芸思潮」短歌賞 発表

第一回「文芸思潮」短歌賞に御応募をいただきまして、まことにありがとうございます。初回で宣伝不足だったこともあり、募集期間が短かったせいもあって、応募総数は五六名一二首に留まりましたが、当初の目的である日本の伝統に則った叙情歌としての短歌は集まり、自然と人生とに和した詠嘆精神は求めることができました。

昨今の日本の現代短歌は荒廃の色のうちにあり、正岡子規が提唱した近代短歌からますます離れて観念の遊びになつていく傾向にあります。これに歯止めをかけるべく、この短歌賞を始めましたが、呼びかけに応じてくれた方々に、短歌精神の生きた命脈を感じることができました。

一月末に集まった応募作の中から、まず選考委員会予選担当によって第一次予選、第二次予選、第三次予選の選考が行なわれ、それらを通じた作品を対象に、四月二十三日、鷲野和弘、五十嵐勉の各選考委員により、最終選考が行なわれました。厳正な審査の結果、以下の通り決定しましたので、ここに発表させていただきます。

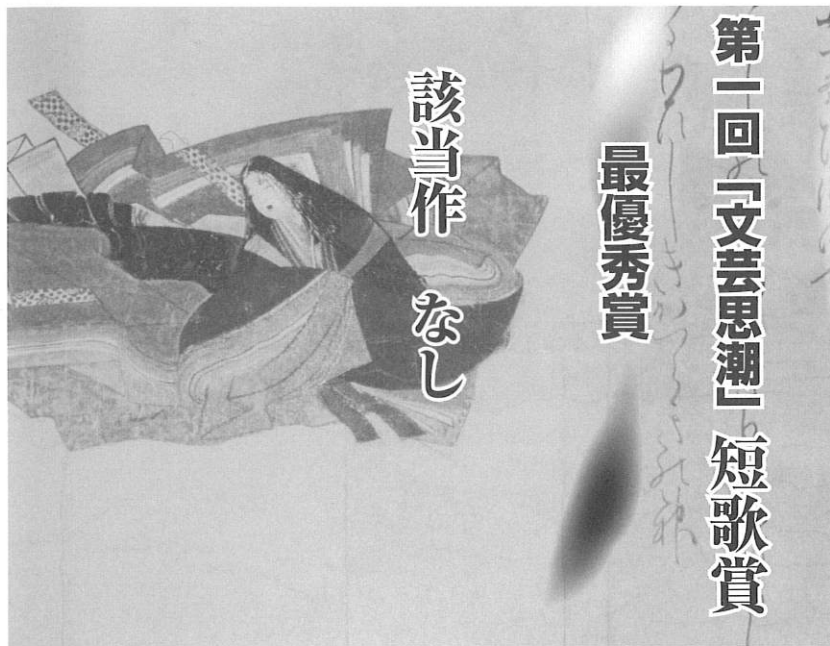
第二回「文芸思潮」短歌賞は、明年も今年とほぼ同じ要領で募集を行なう予定です。どうぞ奮って御応募ください。

（「文芸思潮」短歌賞選考委員会／文芸思潮）

## 第一回「文芸思潮」短歌賞

### 最優秀賞

### 該当作なし



### 優秀賞

辻花ひろ

（大阪府松原市）

新井真樹

（埼玉県児玉郡）

葛岡昭男

（千葉県流山市）

### 奨励賞

川野忠夫

（群馬県伊勢崎市）

浦田穂積

（佐賀県唐津市）

武藤蓑子

（東京都多摩市）

マキミチル

（岡山県真庭市）

廣岡まり子

（東京都世田谷区桜新町）

### 佳作

鈴木深優  
藤野ハレ  
内田沙夜  
東家芳寛  
山内昌人

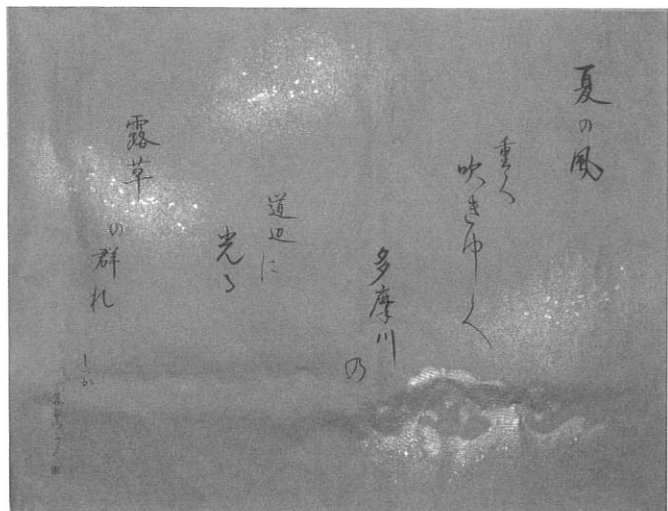
### 入選

世秋恭之介  
小池 進  
愛闘希  
下村きよ子  
萬野行子

清水将一  
あおい満月

岡崎佐紅  
星野秀水  
毛利 豊  
福士謙二

原 比呂子  
近藤國法  
高橋 良  
水色  
水村 凜  
督T O K U



第一回「文芸思潮」短歌賞

優秀賞

辻花ひろ



古い母の膳に湯気立つ菜の鉢魚の骨も抜きくれてあり

受賞の言葉

此の度文芸思潮短歌賞優秀賞の報をいただき、誠に嬉しく、選者の先生方に厚く御礼申し上げます。二年ばかり前、御寺の御住職様から、上人様の御歌集を拝借いたしました、そのお歌の数々に人間の本質を見付け、大変触発させられ、その後から、少しずつ私なりの歌を詠んでまいりました。師もなく歌友もおらず、ひたすら自分のみ見詰めて、書いております。今回御報に接し、一番喜んでくれた娘の世話で毎日暮らしておる次第です。どうぞ今後共御教示の程よろしくお願い申し上げます。

辻花ひろ

つじはな ひろ

1925（大正14年）大阪市浪速区生まれ94歳  
建築設計業の父のもと、虚弱児として生まれる  
高等小学校卒業後、桜川電話局に交換手として就職  
のちに朝鮮電工株式会社に転職するも、終戦により解散  
ビルマ帰還兵の夫との間に娘を出産  
10年前に夫死去、現在娘と同居

故里の廃家の畑にいも植える父祖の残した斜面の土に

新井真樹



受賞の言葉

「文芸思潮」短歌賞の優秀賞受賞は、嬉しさとともに、第一回でもあり、身の引き締まる思いです。選考委員の皆様、期待に応えるべく、今後も精進したいと決意しています。

受賞歌は、限界集落の危機にある故郷、秩父の山村の情景を詠みました。祖先が守った家や畑、自然が消えていく中で、受け継ぐべき心は何かを問うてみました。

今回の受賞で、私の短歌の方向性が、一歩前進したことに感謝いたします。

新井真樹

1953 埼玉県生まれ  
あらい まさき  
1978 立正大学大学院文学研究科修士課程終了  
長野俊英高校国語教師として教鞭をとる傍ら、井上靖の研究論文を執筆し、学会誌に発表する。定年退職後は、作歌活動に専念する。  
主な著書に『井上靖 老いと死を見据えて』（近代文芸社）『私の上に降る雪は』（ほおずき書籍）『井上靖と信州』（新風舎）などがある。  
第46回埼玉文芸賞佳作  
第16回『私からあなたへの万葉集』大賞

## 優秀賞



葛岡昭男

埋立てで遠くなりたる海苔場より戻るべか舟月の明かりに

### 受賞の言葉

この度は不肖私の拙い短歌作品を優秀賞にお選び頂き光栄の極みに存じます。

北風の中に春の足音の近づきを聞き分ける、そんな耳を持ちたい。冬がきたから春は遠くない、と言う人はあっても、春がきたとき冬を語る人はいない。短歌は言葉のいのちです。

人間には水と空気と平和が必要です。水と空気は、人間の生まれる前からありました。平和は、生きていこうとする人間たちが自分たちでつくっていかねばならないと思います。

ありがとうございます。

葛岡昭男

くずおか あきお

1943年生まれ  
元証券マン  
日本歌人クラブ会員  
短歌結社新アララギ同人  
手賀沼アララギ短歌会会員  
日本音楽著作権家連盟会員  
著書「珠玉の政治思想」他  
文部科学大臣賞・読売新聞社賞・流山市長賞

## 第1回「文芸思潮」 短歌賞

## 奨励賞



川野忠夫

川野忠夫

かわの ただお

1947 東京生まれ  
64 都立北豊島工業高校卒業  
64 (株) 埼玉薬品入社  
2013 定年退職  
現在に至る

孫くれし折り鶴一つ捨てかねて今日もまた置く掃除の後に



浦田穂積

浦田穂積

うらた はずみ

1949 佐賀県生まれ  
佐賀県立唐津東高等学校、中央大学法学部に学び会社員  
宅地建物取引士資格・行政書士資格取得会社取締役役員兼不動産関係国家資格取得講座講師  
塾講師を経て2015年より短歌、俳句を始める  
全国規模大会にて41回入選  
エッセイ「兜」「写真」など

古稀なれど老いの欠片も見えざりし土捏ねたたく君の背清し

奨励賞

望郷の春は夕闇我が内に蛙と蝻<sup>けら</sup>蛄<sup>ら</sup>鳴く水明かりあり



武藤 蓑子

武藤 蓑子  
むとう みこの  
1952年長野県生まれ。東京都  
在住。二十代より母親の影響に  
より短歌に興味を持ち、中断し  
ながらも作歌を続けている。

第1回「文芸思潮」  
短歌賞

裏口に置かれしネギに降りかかるやさしき雪をそつと払いて



マキ ミチル

マキ ミチル  
1951 岡山県真庭市生まれ  
公立保育園保育士勤務  
真庭市社会教育指導員  
現在専業主婦  
短歌、詩、童話、エッセイ等を  
趣味とする

図書館の夜の深き闇幾万の書沈<sup>ふみ</sup>ませて柵<sup>かき</sup>続くらむ

廣岡 まり子

廣岡まり子  
ひろおか まりこ  
1967 桃の会、入会  
73 成城大学文芸学部卒業

## 選評

## 写生の中に命を置く

## 五十嵐 勉

第一回の「文芸思潮」短歌賞は、やはり告知も遅れ、宣伝広報も足りなかったせいも、応募者数は少なく、日本の短歌創作の広い裾野を知るには不十分な結果となった。小説やエッセイ、詩の創作の層と、短歌創作の層とは重ならず、別なコミュニティとして存在することも知ることができた。働きかけも、同じやり方では通用せず、もっとタイドに、それぞれの集団に向けて訴えていかなければならぬことを痛感した。反省の上に次回はその心を心がけたい。

応募数が少なくても、優れた作品が一作あれば、それですべて報われてしまうのが文学賞のつねだが、残念ながらそうはならなかった。料紙に筆で書いて表装し、床の間に飾りたいほどの歌は、見つけられなかった。応募数と、初めての試みということに甘んじるよりほかなかったのが、今回である。

もともとこの短歌賞をやるうと思った動機は、朝日新聞や読売新聞、東京新聞など、大手の日曜歌壇の歌のあまり

共感である。

古い母の膳に湯気立つ菜の鉢魚の骨も抜きくれてあり

老いた母への思いやりとそれを受け止める命の交感がここにはあり、それが温かみとなって癒し合う深みがある。九十四歳という死を間近に見つめる互いの眼差しの中にすでにやさしさがある。

故里の廃家の畑にいま植える父祖の残した斜面の上に

都市化と過疎化が表裏として進む現代では、生まれ故郷の荒廃は避けられない姿でもあるだろう。作者はそれに抗するように、父祖の苦勞して残した土をいとおしみ、芋を植える。その苦勞の籠った土を通して繋がろうとする意思が、伝わる命を掘り起こしてくる。

埋立てで遠くなりたる海苔場より

戻るべか舟月の明かりに

東京湾は海苔の産地で、その生業が現在でも営まれている長い時間の繋がりが背景にあり、埋め立てという変化を越えて、繰り返される日々の営みが匂っている。月の明かりの中を戻ってくる舟影が命を浮かべているような鮮やかさで映るところに、この歌の際立ちがあるだろう。

のひどさである。これが短歌かと思われるものが我が物顔に闊歩している。日本の伝統言語表現としてあまりに嘆かわしい。言葉の荒廃が目にあまるので、それならこちらで選んで、本来の短歌はどういうものか、しっかり提示していかうと決心した。折から、全国同人雑誌会議のための東京文学館巡りのツアーで、子規庵を訪ねた。結核脊椎カリエスで寝たきりの病床のなかから、近代短歌の土台を、血を吐いて造った、正岡子規の凄まじい情熱と闘いに打たれた。略血してから死ぬまでわずか七年。その期間が文学活動のほとんどである。小さなその庭に立ったとき、「おまえは何をやっているんだ」と叱られているような気がした。年齢や老後など考えている場合ではない。やれるときにやるしかない。そう決心して短歌賞を立ち上げた。

松の葉の葉毎に結ぶ白露の

置きてはこぼれこぼれては置く

こういう子規の歌を理想として選んでいきたい。

写生の中に命を置き、命の中に写生を置く。

その視点から、最優秀賞が出てこなかったのはやむを得ないといえざるを得ないのだが、しかし、生活に根ざし、具体的な事物や自然の姿に命を重ねて生を深めるその姿勢が感じられる歌は、いくつかあり、伝統の作歌への命脈はかろうじて保たれていることを確認できたのは幸いだ。

優秀作に共通しているのは、命を見る眼であり、命への

言葉の荒廃は精神の荒廃に繋がりが、文化全体の衰微頹廢を招く。短歌のような短詩は、文化という大きなフィールドには関係ないと思いがちだが、そうではなく、むしろ身近な日常での感受性と言語のちよつとした深まりが、総体としてとんでもなく大きな動勢となっていく。言葉が腐れば、文化も腐る。思いやりの乏しい社会は、活力を失う。言葉は精神の骨であり、社会の血液であるう。それを肝に命じて、この短歌賞を続けていきたい。



五十嵐 勉  
いがらし つとむ  
1949 山梨県生まれ  
79「流瀆の島」で群像新人  
長編小説賞受賞  
98「緑の手紙」で読売新聞・  
NTTプリンテック主催第1  
回インターネット文芸新人賞  
最優秀賞受賞  
2002「鉄の光」で健友館文学  
賞受賞  
15より歌人越山しづかの勸  
めて短歌誌「美知思波」入会

## 生きる喜びと懐古

## 鷺野和弘

故里の廃家の畑にいま植える父祖の残した斜面の土に  
優秀賞の新井さんの作品。廃家になったのは、作者が農



家を継がずに教師になったからだ。定年を迎えてから後のことであろうか、父祖の血のにじむような苦勞があったと思われる土地の耕作に、感慨を持って取り組む。志の通った歌である。

老い母の膳に湯気立つ菜の鉢魚の骨も抜きくれてあり  
同じく優秀賞の九十四歳辻花さんの作品。「老い母」はご本人であろう。「膳に湯気立つ」が目に見えるようで、まさしく温かい気持ちにさせてくれる。周囲への感謝の念とともに生きる喜びもまた感じられる。

埋立て遠くなりたる海苔場より戻るべカ舟月の明かりに  
もう一つの優秀賞、葛岡さんの作品は、一幅の絵画を見ようだ。美しい情景というだけではない。海苔場はかつてより遠くなり、ベカ舟を操る漁師の苦勞も偲ばれる。それを思いやる気持ちも表れている。

奨励賞の作品。

孫くれし折鶴一つ捨てかねて今日もまた置く掃除の後に  
川野さんの作品は孫への愛情が満ちている。孫からもらった折鶴は、そうやすやすとは捨てられない。少し考えてまた元の場所に戻す作者の振る舞いがユーモラス。

古稀なれど老いの欠片も見えざりし

土捏ねたたく君の背清し

酒酌めば笑顔盛りて早春賦歌いし母の歳とうに越え

浦田さんの歌は、私はもう一首の後者の歌を評価した。

もう亡くなられていると思われる母を偲ぶ。お酒を飲んで愉快になった母をその当時はどんな思いで眺めたのか。あるいは半分、苦笑交じりであったかも分からない。しかし、今はひたすら懐かしい。

望郷の春は夕闇我が内に蛙と蟻蝸鳴く水明かりあり  
武藤さんの歌は故郷を偲ぶ。蛙と蟻蝸は些か騒がしいが、夕暮れの水張田であろう。水明かりが清冽な印象を与えている。

裏口に置かれしネギに降りかかる

やさしき雪をそっと払いて

マキさんの歌。裏口に置かれたネギとは、どんな状況だろう。届けた相手は農家の友人だろうか。作者は雪を払ったのであるから、届けられたものを受け取ったに違いない。普段の付き合いがしのばれて、何やら懐かしい光景ではないか。

図書館の夜の深き闇幾万の書沈ませて棚続くらむ

廣岡さんの図書館の歌は、着眼がユニークである。人間の知的行為の凝縮とでもいうべき書物、万巻のそれが静かに眠っている、呼吸しているのである。その息遣いが伝わってくる。

佳作にもいいものがあるので、触れておきたい。

とんぼうの風の高さに停まりぬ

つかの間夕陽纏ひて燃ゆる

近藤さんの歌、独居独酌の雰囲気が出ている。言葉を整理すればさらに良くなる。

いにしへの川の流れを思はする風が吹きをり蛇崩の道  
高橋さんの歌。蛇崩とは興味を惹かれるが、言葉の順序で損をしていないか。

うねり出づ真昼の月の寂しきも耳に届かぬ糸杉の唸り  
藤野さんの歌はゴッホの絵を想起させる。ただ、言葉の強さには注意が必要。読み手が引いてしまうこともある。

障害を越えて光りて生きたくも病の雨で散る桜花  
この障害の歌も惹かれる一方で、言葉が過ぎるのではと感じられてしまう。

天を突くこほりの城の窓の奥細く侘しく春待の滝  
春待の滝の歌は、厳しさの中に春への期待が出ている。「細く侘しく」は工夫が欲しいところだ。

「風の高さに停まりぬ」が肝である。トンボの空中におけるホバリングは、実景として誰しもが思い当たるのではないか。それをこのように表現した。夕陽にからめたのも、似つかわしいととるのか、ありきたりと思うかで評価の分かれるところであろう。

寝転んだ草の布団の耳元でてんとう虫が生きている音

「生きてる音」とは、どんな音か。例えば「羽をふるわす」だったら、具体的に。

唇を彩る紅の鮮やかさ祈りのように待つ君の熱  
表現が些か生硬だが、応募作中で唯一の相聞だった。ある種の熱情を伝えている。

焚き火見る翁は来し方重ねをり孫は行く末思い火の果つ

水村さんの焚火の歌は、狙いはわからないでもないが、いっそ二つに分ける方法もあったように思われる。

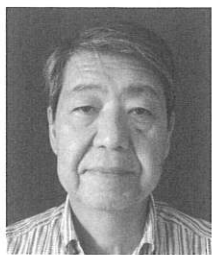
花香る春君逝きて時ははやしぐれ雨ふる秋深まれり  
督さんの歌は、親しい人を亡くした思いがしみじみと現れている。「春」と「秋」という語が出てくるのが評価の分かれるところか。

天平のまほろばあはれ野ざらしの

礎石へしんしん春の陽の耀る

天平の歌は素材に興味をひかれるが、「しんしん」「耀る」が考えどころ。

木の実降る音を肴にひとり杯苦屋訪ね来風はあれども



鷺野和弘

わしの かずひろ

1947 愛知県生まれ  
70 早稲田大学第一商学部卒。  
84 短歌会「桃の会」(主宰故山川京子) 入会  
2010 より同会事務局および「桃の会だより」編集担当